

平成 3年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

## 青梅町の伝説 (その2)

### 4. わかこぼしの怪

千ヶ瀬バイパスが大横丁 (市民会館から万年橋に続く道) に突き当たるT字交差点の直ぐ左側に、以前「ふじや」という割烹旅館があり、その門の端に「稚子橋」(わかこぼし) という橋がありました。「ふじや」の塀と橋の欄干のわずかな隙間から下を眺めると、子供にとっては怖さが手伝ってか、かなり深いところに小さな流れが覗かれるという塩梅です。この橋は、夜間に通ると、橋の下から赤ん坊の泣き声が聞えるといわれたものです。昔、ある若い女がやむにやまれず、この橋から我が子を捨てたのだと言うお話つきで…。多分大昔、生まれたばかりのこどもを闇に葬らなければ生きていけないほどきびしい時代の、悲しい歴史を背景に持つ言い伝えなのでしょう。

道路の改修でこの橋も姿を消してしまいましたが、最近、この地に橋の親柱が戻され、傍らに説明が建てられました。

### 5. 寂蓮法師とむらさめの歌

百人一首の一枚札といえば、「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」の七首、そしてそのうちで「む」は「村雨の露もまだ干ぬ槇の葉に 霧立ち上ぼる秋の夕暮」という寂蓮法師の歌をさすことはよく知られていることですが、この歌は、寂蓮法師が青梅に来て詠んだ歌なのだという言い伝えがあります。

その言い伝えというのは、寂蓮法師は金剛寺の住職として来青し、その後、梅岩寺の住職となり、その時、寺内にあった「マキの陰堂」というお堂でこの歌を詠んだというのです。

また、別の言い伝えによれば、この歌は、寂蓮法師が旅の途中青梅の「霧窪」(青梅坂トンネルのある沢) のさしかかった時、霧が立ちこめられ、その時に詠んだものだというものです。青梅坂トンネルの上の林間道路にかかる「叢雨橋 (むらさめばし)」という橋、霧窪という沢の名前、このあたりにこの話がうまれた理由がひそまれているのでしょうか。

### 6. おりん淵

釜の淵・水の公園がかかる柳淵橋のやや下流から、多摩川は大きく右に流れを変えます。そのまがりばなあたりは、昔は本流からはずれて青々と水をたたえる淵になっていました。そしてその名を「おりん橋」と言いました。ここにはこんな話が伝わっています。

いつのころのどんな人で、またどのようなわけがあっただかは知らないが、昔、「おりん」という若い女がこの淵に身を投げて死んだというのです。また一説によると、この「おりん」はある罪のため、この淵の上で首を斬られたともいわれているそうです。淵にまつわる女性の悲話は、丹波溪谷の「おいらん淵」をはじめ、各地にあるようです。

(文責 野村慎三郎)